

# 海外生活 エッセー

シンガポール事務所

## プラナカン文化を支えた日本の技術 ~色鮮やかなタイルに込められた日本の職人技~

(一財)自治体国際化協会シンガポール事務所 所長補佐 堀部 寛 (山口県萩市派遣)

### → プラナカン文化とは

シンガポールには高層ビルの合間を埋めるようにプラナカン建築と呼ばれる間口が狭く奥に細長い2~3階建ての日本の町屋のような古風な建物が軒を並べています。

プラナカンとは、近世に中国南部からマレーシアやシンガポールにやってきた中国系の男性と現地の女性との間に誕生した子孫のことで、彼らはシンガポールで中国やマレー、ヨーロッパの文化を融合させた独自の生活スタイルを築いていきました。

プラナカン建築の装飾には、プラナカントイルと呼ばれる、花や果物、鳥などのデザインに、ピンクや黄色、コバルトブルーなど多彩に色付けされたレリーフ調のタイルが使われています。パステルカラーの建物とマッチしたその美しい装飾をバックに記念撮影をする観光客をよく見かけます。

### → プラナカントイルは日本製?!

ある日、アンティークのプラナカントイルを専門に扱うお店があるということで訪れてみたところ、お店にあるタイルのほとんどが日本製だと聞いて驚きました。

このプラナカントイル、元々はイギリスで作られたマジョリカタイルに原点があると言われています。1800年代、シンガポールにはイギリスなどヨーロッパから多くの装飾タイルが輸入され、プラナカンたちはそれらを建物や家具に使用してきました。ところが、第一次世界大戦後、イギリスをはじめヨーロッパでのタイル生産が落ち込み、代わって日本製のタイルが輸入されるようになったそうです。

この頃、日本ではイギリスのタイル製法を研究、確立させた和製マジョリカタイルと呼ばれるタイルが製造されており、色付けは筆で一色ずつ釉薬を載せ、デザインには凹凸があり、製造には大変な技術と手間がかかったそうです。最盛期には10数社のタイルメーカーが製造

していたとのこと。当初は国内の洋館や旅館、銭湯で使用されていましたが、大正末期から昭和の初めにかけ、東南アジアやインドへ大量に輸出されるようになり、ちょうどプラナカン文化が華やいでいたシンガポールにおいても好まれて使われるようになったとのこと。

### → 里帰りする日本製タイル

老朽化で解体された建物で使用されていたアンティークタイルはコレクターズアイテムとして、日本円に換算して1枚数千円からレアなものは数万円で、専門店や骨董店で販売されています。タイルの裏側には製造国やタイルメーカーの商標が刻印されているのですが、市内の骨董屋でタイルを物色していたところ、全く同じ大きさ、同じデザインで、イギリス製のものと日本製のものを発見しました。おそらくイギリス製のデザインを参考にして、後に日本で生産されたものなのでしょう。

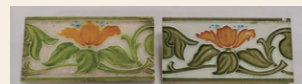
最近では、このタイルをお土産に買って帰る日本人が増えているとのこと。額に入れて飾ったり、中には数十枚まとめて購入して洗面台やキッチンの装飾として使う人もいるとのこと。

前掲の専門店のオーナーによると、昨年11月、シンガポールのオン教育大臣が河野外務大臣を表敬訪問した際、記念品として額に入れたプラナカントイルをプレゼントしたとのことでした。

遠く東南アジアの文化を支えた日本の製品に、あらためて注目される日が来ることを期待しています。



プラナカン建築を装飾するタイル (門柱や2階部分)



イギリス製(左) 日本製(右)